

原著

## ループリックを評価基準に用いた小論文指導に関する研究

櫻木 理恵<sup>1)</sup>, 稲田 勤<sup>1)</sup>, 光内 梨佐<sup>1)</sup>, 吉村 知佐子<sup>1)</sup>, 池 聡<sup>1)</sup>, 土居 奈央<sup>1)</sup>  
高地 正音<sup>2)</sup>, 石川 裕治<sup>1)</sup>

### Research on teaching book report writing using a rubric as evaluation criteria

Rie Sakuragi<sup>1)</sup>, Tsutomu Inada<sup>1)</sup>, Risa Mitsuuchi<sup>1)</sup>, Chisako Yoshimura<sup>1)</sup>, Satoshi Ike<sup>1)</sup>, Nao Doi<sup>1)</sup>  
Masato Kochi<sup>2)</sup>, Yuji Ishikawa<sup>1)</sup>

#### 要 旨

本研究では、小論文の客観的評価法としてループリックを作成し、それを活用した小論文指導の効果について検討した。学生には「階段とエレベーターはどちらが有用か」という課題が与えられ、どちらかの立場に立って論を展開していくための、双方の利点欠点を列挙した「論拠プリント」の作成が求められた。次に、「論拠プリント」で書いた項目をもとに、評価用ループリックの5つの指導項目（段落分け、句読点・誤字・脱字、語彙・表現、説得力、構成）にそって小論文を書くことを求めた。結果、指導項目の「段落」「句読点」「構成」「説得力」は練習1回目から、「語彙」については練習3回目からプレテストとの間に有意差を認めた( $p<0.05$ )。また、指導項目の5項目全てにおいてプレテストに比較しポストテストの得点が有意に高かった( $p<0.05$ )。以上より、今回用いた小論文指導方法は、学生の論文作成能力を短期間で改善させるうるものと考えられた。キーワード：ループリック、小論文、指導・評価

#### Abstract

In the present study, a rubric was created as a method for objectively evaluating book reports and its effects were analyzed by actually applying the criteria when teaching book report writing to students. The students were asked to read an article of approximately 800 words in length, and write a book report in line with the seven instructional items (i.e., summarizing, punctuation, paragraphing, meaning, relevance, structure, and rhetoric) that comprise the evaluation rubric for this type of writing. Consequently, from the first lesson onwards, summarizing and paragraphing showed a significant improvement compared to the pre-test results, and from the second lesson, the same was observed for punctuation, meaning, relevance, structure, and rhetoric ( $p<0.05$ ). Moreover, for all 7 instructional items, the scores for the post-test were significantly higher than those for the pre-test ( $p<0.01$ ). These results demonstrate that the teaching method for book report writing used in this study improves students'

---

1) 高知リハビリテーション学院 言語療法学科

Department of Speech Language and Hearing and Pathology, Kochi Rehabilitation Institute

2) 高知リハビリテーション学院 理学療法学科

Department of Physical Therapy, Kochi Rehabilitation Institute

ability in this particular area over a short period. Moreover, evaluating students' performance by categorizing it into 7 items allows the students themselves to systematically identify their weaknesses. This helps the students exercise foresight through making projections, thereby promoting their learning behavior.

Keywords: Rubric, book reports, evaluation and instruction, foresight

## 【はじめに】

言語聴覚士養成課程の学生にとって論文を書くことは、卒業研究、就職後の学会発表、論文発表を行う上で欠くことができないスキルである。さらに、論文構成の段階で行う様々な思考過程を通じて養われる論理的な思考力は、その後の生涯学習の中で大きな意味を持つようになる。したがって、より効果的な論文指導方法を開発する意義は大きい。

稲田<sup>1)</sup>は、養成課程の2年次に行われる小論文指導では、論点・意見の明確化、論理性、課題文の理解、論証の有無を重要な観点としてあげている。宇佐美<sup>2)</sup>は、高校生を対象に小論文評価のデータ解析において評価観点を語句、表現の正確さ、語彙力、課題内容の解釈、簡潔性、主張の明確さ、構成、一貫性、説得力、独創性、要約、形式としている。つまり、これらの観点から小論文を客観的に評価しうるツールを開発することが効果的な指導を実現するうえで必要である。

見尾<sup>3)</sup>は、小論文指導に定量的評価を与えるため、ルーブリックを使用している。ルーブリックについては、学習者の「パフォーマンスの成功の度合いを示す尺度と、それぞれの尺度に見られるパフォーマンスの特徴を説明する記述語で構成される、評価基準の記述形式」として定義される評価ツールと説明されている<sup>4)</sup>。本研究では、小論文指導について評価の観点を明確にし、観点ごとに評価が数値化できるようにしたルーブリックを用いた。そして、ルーブリックを活用した小論文指導の効果について検証した。

## 【方 法】

### 1. 対象

A県にあるB専門学校生C学科2年次生17名(男

7名,女10名)。年齢は19~38歳(平均 $21.7 \pm 5.0$ 歳)であった。

### 2. 手続き

#### 1) 小論文評価用ルーブリック(図1)

小論文評価に必要な指導項目は、稲田<sup>1)</sup>の指導項目を参考に、「段落分け」「句読点・誤字・脱字」「語彙・表現」「説得力」「構成」の5つを設定した。また、各々の指導項目について評価の観点を設定し、どの程度達成できているかを評価A(5点)から評価E(1点)までの5段階で評価した。

#### 2) 指導方法と指導効果の測定

学生は、まず「階段とエレベーターはどちらが有用か」のような、どちらかの立場に立って論を展開していく課題を与えられ、双方の利点欠点を列挙した「論拠プリント」の作成を求められた。次に、「論拠プリント」で書いた項目をもとに、評価用ルーブリックの5つの指導項目にそって小論文を書くことを求められた。小論文の指定文字数は800字以内であった。

プレテストとして、指導の行われていない状態で課題を与え小論文を書かせた。その後、小論文評価用ルーブリックを用いて小論文の書き方を説明した。添削指導では、ルーブリックのどの部分ができていないかが分かるように行った。添削を受けた小論文は訂正して再提出させた。5回の小論文添削指導終了後、ポストテストとして、プレテストと同様な課題文を与え小論文を書かせた。

統計学的処理には、Wilcoxon 符号付順位検定を用い、危険率5%を有意水準とした。

#### 3) 倫理的配慮

学生には、授業時間内に、「小論文の二次利用に関する説明書」を提示し、口答で説明した。説明では、参加に関しては個々人の自由意思であり、デー

	観点	評価 A	評価 B	評価 C	評価 D	評価 E
段落	(1)段落の個数 (2)段落の切る位置 (3)段落を変えるときの語句 (4)段落ごとの長さ	観点のうち、 4つが出来ている	観点のうち、 3つが出来ている	観点のうち、 2つが出来ている	観点のうち、 1つが出来ている	全くできていない
句読点, 誤字・脱字	不適切な表現の個数	0	1～3	4～6	7～9	10以上
語彙, 表現	不適切な表現の個数	0	1～3	4～6	7～9	10以上
説得力	(1)論拠の項目数が4つ以上ある (2)論拠の利点・欠点の正確さ (3)論拠の設定に無理がない (4)課題の理解	観点のうち、 4つが出来ている	観点のうち、 3つが出来ている	観点のうち、 2つが出来ている	観点のうち、 1つが出来ている	全くできていない
構成	(1)背景説明 (2)問題提起 (3)自分の主張 (4)まとめ	観点のうち、 4つが出来ている	観点のうち、 3つが出来ている	観点のうち、 2つが出来ている	観点のうち、 1つが出来ている	全くできていない

図1 小論文評価のためのルーブリック

タ利用を好ましく思わない場合は同意する必要がない旨を伝えた。そして、同意が得られた学生のデータのみを利用した。

### 【結 果】

指導項目別に回ごとの中央値等を表1に示した。指導項目の5項目全てにおいてプレテストよりポストテストのほうが有意に高かった( $p<0.05$ )。指導項目の「段落」「句読点」「構成」「説得力」は練習1回目よりプレテストとの間に有意差を認めた( $p<0.05$ )。「語彙」については練習3回目からプレテストとの間に有意差を認めた( $p<0.05$ )。

ポストテストと比較すると、指導項目「句読点」「語

表1 指導項目別の平均点

	段落	句読点	語彙	構成	説得力
プレテスト	2.0*	2.1*	2.0*	2.1*	2.1*
練習1回目	4.2#,*	3.2#,*	2.1*	3.2#,*	3.1#,*
練習2回目	2.2#,*	4.2#,*	3.3*	3.2#,*	3.2#,*
練習3回目	3.2#,*	3.1#,*	3.1#,*	3.1#,*	3.1#,*
練習4回目	4.1#	3.1#,*	3.1#,*	4.1#	4.1#
練習5回目	4.1#	4.1#	4.0#	4.0#	4.0#
ポストテスト	5.1#	5.1#	5.1#	4.1#	4.1#

中央値(四分位範囲)

プレテスト VS 練習1回目, 練習2回目, 練習3回目, 練習4回目, 練習5回目, ポストテスト #  $p<0.05$

ポストテスト VS 練習1回目, 練習2回目, 練習3回目, 練習4回目, 練習5回目, プレテスト \*  $p<0.05$

彙」は練習4回目までポストテストよりも成績は有意に低かった( $p<0.05$ )。その他の「段落」「構成」「説得力」については練習3回目までポストテストよりも成績は有意に低かった( $p<0.05$ )。

#### 【考 察】

ループリックを評価基準に用いた小論文指導の効果について検討した。

指導項目の5項目全てにおいてプレテストよりポストテストの得点が有意に改善した。また、「段落」「句読点」「構成」「説得力」は、練習1回目から得点が有意に改善した。以上のことから、今回用いた小論文指導方法は、学生の論文作成能力を短期間で改善させうるものと考えられた。行動は、行動した結果、環境から与えられる後続刺激と行動する際、周囲に存在する先行刺激によって影響を受ける<sup>5)</sup>。行動した結果、良いことが生じた場合、行動は強化される。逆に、嫌なことが生じたり、環境からの応答がなかったりすると行動は減少する。通常、小論文を添削した場合、「段落」「句読点」「語彙」「構成」「説得力」などを識別して修正することはないため、学習者は不適切な点を系統的に把握することができない。また、「句読点」の修正が数多くあったとしても、修正数をカウントすることはない。一方、ループリックを用いた場合、各項目が5段階で客観的に評価されるため、上達が具体的に表れ、成績向上がフィードバックされやすい。つまり、小論文の作成に強化刺激を随伴させやすい状況を生み出せるため、学習が定着しやすいものと考えられる。さらに、5項目に系統的に分けて評価することによって自分の弱い部分を系統的に把握できるため、改善すべき点が明らかになる。これは見通しを持たせる先行刺激であり、学習行動をさらに生じやすくさせるものと考えられた<sup>6)</sup>。

ポストテストと比較すると、「段落」「構成」「説得力」については練習4回目の得点が、すでにポストテストと差がなかった。これらの項目については

より短期間の指導によって改善が図れる可能性が示唆された。

指導項目「段落」「構成」を除くと、練習4回目においてポストテストとの間に有意差を認めなかった。また、5回目の成績は、すべての項目でポストテストとの差を認めなかった。以上のことは、5回目の指導前にはポストテストと同等の成績に到達していたことを示しており、4回の指導でも今回と同等の成果を上げられる可能性があるものと考えられた。

「語彙」については練習3回目までプレテストの成績と有意差を認めなかった。また、ポストテストと比較した場合、「語彙」は練習4回目まで成績は有意に低かった。「語彙」は論文を書くスキルというよりも、むしろ知識量に依存するため、今回の指導においても効果が得られにくかったものと推測された。

#### 【文 献】

- 1) 稲田 勤：言語聴覚士養成校における専門教育の現状と課題及びその対策。リハビリテーション教育研究10：1-2, 2005。
- 2) 宇佐美慧：小論文評価データの統計解析－制限字数を考慮した測定論的課題の検討－。行動計量学38(1)：33-50, 2011。
- 3) 見尾久美恵：小論文指導における定量的成績評価と課題に対する学生の評価との間の相関分析。川崎医療短期大学紀要36：1-8, 2016。
- 4) 日本教育方法学会(編)：現代教育方法辞典。図書文化社、東京、2004、pp293。
- 5) 山崎裕司、山本淳一(編)：リハビリテーション効果を最大限に引き出すコツ(第2版)三輪書店、東京、2012、pp17-20。
- 6) 山崎裕司、山本淳一(編)：リハビリテーション効果を最大限に引き出すコツ(第2版)三輪書店、東京、2012、pp67-72。